

2016年11月20日 第523号 (隔月発行)

アジアの友

The Asia-no Tomo

10-11

OCTOBER-NOVEMBER

2016

奨学団体に聞く (公財) 本庄国際奨学財団
JOB博CHINAで聞く 中国で求められる日本語人材





第15回ABK秋祭りを開催

2016年10月22日(土)、今年で15回目となる「ABK秋祭り」を開催しました。今年も近隣の方々や卒業生など、500名を超えるお客様が来館され、留学生たちが腕を振った各国料理に舌鼓を打ちました。また舞台上では国際色豊かな歌や踊り、演奏が披露され、大盛況のうちに幕を閉じました。



アジアの友

2017年10・11月号 第523号

目次

| | |
|----|---|
| | レポート |
| 2 | ドズー日本語学校 25周年記念感謝会 日本で開催 |
| | 奨学団体に聞く |
| 4 | 公益財団法人 本庄国際奨学財団 |
| | 留学生の就活 |
| 12 | JOB 博 CHINA で聞く 中国で求められる日本語人材 |
| | 留学生インタビュー |
| 16 | TNI から ABK へ タイ3人娘の日本留学 |
| | 連載コラム |
| 23 | 泰日工業大学 奮闘記 (第20回) 「2016年度卒業式と日本で働く TNI 生」 水谷光一 |
| | ABK is My home |
| 26 | 最近の来館者たち |
| 30 | 知友会通信 |
| 32 | Photo News & MEMBERS |

<表紙写真> ABK 秋祭りで故郷インドネシア パプア州の伝統ダンスを披露するためペインティングをし、伝統衣装に身を包んだ留学生3人。(左から Ostina さん、Indah さん、Marthina さん)



ベトナムで最大の学生数を誇る「ドンズー日本語学校」が開校25周年を迎え、その記念感謝会が10月8日、川崎市国際交流センターにて、およそ300名の参加者を集

めて行われた。式典では主催者であるゲン ドク ホエ校長の挨拶に続き、支援者たちへの感謝状贈呈などが行われた。また、設立当初からの支援者として感謝状を授与された当協会（ABK）小木曾友理事長が祝辞を述べた。

ドンズー日本語学校（以下ドンズー）が誕生したのは1991年。ベトナムの改革開放政策により、外国人旅行者が急増し出した頃である。バブル後退期に入っていた日本経済だが、まだその影響力は強く、ドンズーの受講生は毎年右肩上がりで増加し続けた。

その後アジア各国の著しい経済成長、日本経済の失速等により、2006年をピークに学生数は減少するが、東日本大震災が発生した2011年を底に再び増加に転じ、今日まで急速に学生数を伸ばしている。

現在ドンズーはホーチミン市に本校と分校が5つ、ダナンに一つの分校を持ち、計7つの校舎に6,000名を超える学生が学んでいる。

また、同校では開校以来継続して日本留学プログラムにも取組み、これまで1,860名もの留学生を日本に送り出している。

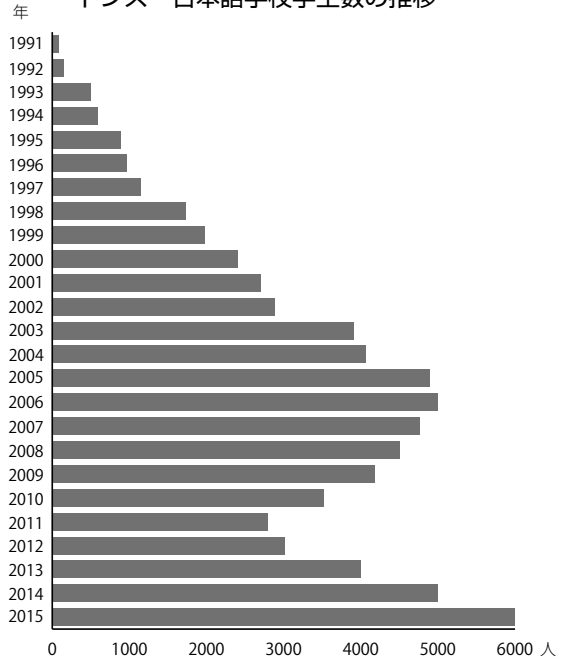
この留学プログラムはただ希望者に日本の学校を紹介するというものではなく、ベトナムの発展を担う人材を育成するという大きな目的を持っている。日本の先端技術や生産管理等、そして日本の社会、文化を学んでもらうことで、帰国後ベトナムの工業化、近代化に貢献するベトナム人学生を育てることを目標としている。そのため貧しくても成績が優秀で大きな夢を持つ若者がベトナム各地から厳選して集められ、日本語をはじめとした日本留学のための基礎教育はもちろん、マナーや道徳教育なども行われている。

なお今回の感謝会は、東京の他に4カ所（鹿児島、広島、大阪、盛岡）でも行われ、各地で学んでいるドンズーの留学生およびOBたちが、各地の関係者の協力を得て準備から運営までを行い、支援者、関係者をもてなした。



挨拶をするホ工校長

ドンズー日本語学校学生数の推移



祝辞を述べるA.B.K.小木曾理事長



感謝状を授与された支援者たち



謝恩会会場の様子



留学生たちによるパフォーマンス

奨学団体 に聞く

公益財団法人 本庄国際奨学財団

Honjo International Scholarship Foundation

優れた留学生たちが安心して勉学に励めるよう、経済面のみならず独自のコミュニケーションにより、時に学生の精神面をも支える奨学団体。その魅力をご紹介する本コーナーでは今回（前号の佐藤陽国際奨学財団同様）今年設立20周年を迎えた本庄国際奨学財団の常務理事 松本功一さんと事務局長の河島伊都子さんにお話をうかがいました。

<概略>株式会社伊藤園の創業者である本庄正則氏が1996年に設立した本庄国際奨学財団。主に発展途上国出身で恵まれない環境にありながら、向上心に燃える優秀な外国人留学生と、より優秀な技術と高度な能力を身に付けるために国内外の大学院で学ぶ日本人学生に奨学援助を行っている。今年創立20周年を迎え、これまで支援した奨学生は500名を超える。

〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷 1-14-9

Tel 03-3468-2214 E-mail:info@hisf.or.jp URL <http://hisf.or.jp>

<奨学金プログラム>

①外国人留学生奨学金（対象：日本の大学院で学ぶ外国人留学生）

募集人数●15～20名

奨学金●月額20万円（1～2年）、月額18万円（3年）、月額15万円（4～5年）

*いずれも学位取得までの最低年限を支給期間とする

②日本人国内大学院生奨学金

対象●日本の大学院で学ぶ日本人の学生

募集人数●約5名

奨学金●月額20万円（1～2年）、月額18万円（3年）、月額15万円（4～5年）

*いずれも学位取得までの最低年限を支給期間とする

③海外留学日本人大学院生奨学金

対象●海外の大学院で学ぶ日本人の学生

募集人数●約5名

奨学金●月額2,000USDまたは20万円（1～2年）、月額1,800USDまたは18万円（3年）、月額1,500USDまたは15万円（4～5年）

*いずれも学位取得までの最低年限を支給期間とする

<海外提携奨学金プログラム>

対象●海外の大学で日本に関する研究をする大学生、大学院生。募集・選考は提携先の大学・機関にて行う。

<研究助成金プログラム>**「食と健康」研究助成金**

健康維持に対する食品あるいは食品成分の効果を、主にヒトを対象とした試験によって明らかにしようとする研究を助成する。

募集件数●約5件

助成金●1件あたり100万円～300万円

75か国に及ぶ外国籍奨学生の出身国

—— 御財団の奨学金プログラムについて、募集は一般公募ということで、学校を限定していませんが、外国人留学生奨学金についてはどのくらいの応募があるのでしょうか。

河島 昨年行った2016年度生の募集では約850名の応募がありました。本当にたくさんのお優秀な方からの応募があるので、絞らなければいけないのが申し訳ないのですが、この一般公募については創設者である本庄正則の強い希望でしたので、継続していきたいと考えています。

—— 選考審査はどのように行っているのでしょうか。

河島 書類選考は、大学の成績と研究計画書を奨学生選考委員が見て面接審査に進む人を選びます。

松本 最後は選考委員長である伊藤園社長の面談で、伊藤園本社の社長室という、普段はなかなか入る機会の無いような所で面接をします。この時はみなさんかなり緊張

した面持ちとなりますね。

—— 成績以外の部分で重視されていることなどはありますか。

松本 成績が優秀であることは大前提ですが、財団としてはできるだけいろいろな国の人を採用したいという思いはあります。これまでに日本を除くと75か国の学生を採用してきていますが、毎年3～4か国、新しい国が増えているといった感じです。今年はいち、マダガスカル、アフガニスタンといった国が加わりました。

河島 最初は他のプログラムで来日し、学部を終えられた後、大学院に進学するにあたって私たちの奨学金に応募するという人が多いですね。

—— 面接は日本語でされるそうですが、日本語力はどのくらい問われるのでしょうか。

松本 日本語のレベルについて、厳しい決まりというものは設けていません。面接時に日本語が十分でない場合、本人にこれから日本語を学ぶという意欲があることを確

認して、英語で面接をすることもあります。

河島 最近は英語のみで修了できるという研究室もありますが、日本の大学が優秀な学生を集めるためにはそういった状況も仕方ないのかなとは思っていますので、私たちもそこには合わせていこうと思っています。実際、先代の理事長が健在の頃から特に医学系の方で日本語はできないという方もいたのですが、彼はそういう方を採用するにあたって、日本語をしっかり学んで欲しいということをよく言っていました。日本語が出来ないという理由で奨学金を切ったりはしないけど、半年後にもう一度面接をするから、その時までには勉強しておいてくださいねと言っておくと、みなさん忙しいのに一生懸命日本語を勉強して来ましたね。学問の上で日本語は必要なくても、せっかく日本に来たのだから、日本語を学んで日本のことを知ってもらいたいというのが本庄の思いだったと思います。時代はだんだん変わってきたのかなとは思いますが、やはり研究だけで終わるのではなく、日本のことを知って好きになってもらいたいという思いは私たちも持っています。

—— 応募資格に「学業修了後は母国で働くこと」とありますが、みなさん卒業後すぐ帰国されるのでしょうか。

河島 最近は日本での就職を希望する学生が増えています。日本企業も積極的に留学生を採用するようになってきていますから、直ちに帰りなさいということは言いません。

松本 みなさん面接時は「卒業したら帰国します」と言っていますが、いざ卒業する

段になると、いちど日本で就職して、企業の中で母国に派遣される形で戻りたいという人が多くなっています。

河島 また、エンジニア系の方だと母国に大学はあっても研究室の設備が十分でないので、研究を続けられないということで、再び日本に戻ってくるという人もいます。

奨学金は学位取得まで

—— では次に日本人向けのプログラムについてですが、こちらは国内のほか、海外で学ぶためのプログラムも用意されていますね。

河島 本庄正則は、当初日本人医学生への海外留学を支援したいという思いから奨学金団体の設立を考えていたようで、海外留学日本人大学院生奨学金については外国人留学生奨学金とともに設立当初からあるプログラムなんです。最終的に分野は問わないで募集をすることになったので、様々な分野の奨学生がいます。

松本 面接時にお話を聴いていると、日本から海外に行く人はいろんな事情の人がいるということがわかります。共通しているのは、みなさん本当にギリギリの経済状況の中でやっているということです。

河島 日本人の場合、母国の事情というのは考慮できませんし、みなさん揃って非常に優秀ですから、選考委員の先生方も書類選考に苦勞されているようです。もちろんみなさんキャリアアップのために勉強しているのですが、その中でも社会のために働

きたい、将来学んだことをこんな風に社会に還元したいということをしっかり語れる人というのを最終面接では重視しているようです。

—— それぞれの奨学金は受給年数を選ぶことで修了時まで受給することができるわけですね。

河島 学位取得まで面倒を見るということ、これも私たちの奨学金の一つの特徴ですね。

松本 毎月学生とは面談をしてその時々状況は聞いています。ほとんどの学生は休日返上で研究室に通い、一生懸命に勉強や研究をしています。奨学金の延長はできないので、留年しないように発破をかけることもあります。

—— 毎月面談をされているというのは素晴らしいですね。

河島 交流イベントで顔を合わせる月はありませんが、とにかく月に一回はお互いの顔を見て話しましょうということで、事務局まで来られない遠方の方はSkypeを使って行っています。ここでは学業のことはもちろんですが、私生活や国のことなどもいろいろ話してもらっています。

松本 この面談については理事長からも、しっかり頼むと言われているんです。お金を出すだけではなくて、学生の心身のケアもしっかり行うこと、そのためには顔を見て話すということが大事だということですね。それはこの財団の特徴でもあり、他にはないところだからしっかりやってくれということですよ。

—— 面談をされていて、奨学生はどのよ



松本さん

うなことに苦労していると感じますか。

松本 研究テーマが途中で変わるという人が最近増えていますね。最初は研究計画書通りに進めるわけですが、その後先生との折り合いや、やってみただけ自分には向いていなかったということで、テーマを変えますというケースが最近が多いです。そういった点での悩みを抱えている学生は少ないようです。

河島 先生や研究室の同僚との関係については、愚痴を聞いてあげるだけで何もしてあげられないのですが、なかなか日本人とのつきあいは難しいと感じている人は多いと感じます。そういう意味で日本の大学の研究室は厳しいと思う人も増えているように思います。

交流活動と卒業生との関係

—— 交流活動についてはどのようなことをしているのでしょうか。

河島 交流活動としては、研修旅行や伊藤園の工場見学、OBを招いて講演会をおこなうOB会、博士・修士論文の発表会などを行っています。OB会はこの間の日曜日に行ったのですが、卒業生に中国から来ていただき講演をしてもらいました。

—— みなさん積極的に参加されるのでしょうか。

松本 交流会については義務事項ではなく、忙しければ来なくても構わないということにはなっていますから、よく参加する人とそうでない人に分かれてるといった感じはありますね。

河島 OB会などでは、ただ案内を送るだけではなく、講演内容に関係するような研究をしていた人などには「久しぶりに出てこない？」と声をかけることはあります。ただ、OBの方はみなさんだんだんと家庭を持ったりしていますから、土日の行事に参加するというのはなかなか難しいのかなと思います。また、それ以上に忙しいと感じるのが現役の大学院生です。仕事をしていたら週に2日休みがあるわけですが、研究活動には決まった休みはないので、毎日、盆暮れなく研究室に行っている人もいます。

松本 土日の行事に来られないというから、何をしているのと聞くと研究室に出ていると言うんです。休むということを先生に言いにくいケースもあるようですね。

河島 ただし、奨学生の場合、年間を通して一回も交流行事に来ないという人はいないと思います。そしてみなさん来ると楽しんで帰って行きます。他の奨学生に会えて、自分の研究とは関係のないことが話せるので、交流会に参加するのが楽しいと言っていた学生もいましたね。研修旅行は奨学生だけの参加になりますが、今年の京都旅行にはおよそ30人の参加がありました。

松本 自分の大学がある県から出たことのない人もいて、研修旅行などではリラックスできて楽しかったと心から言ってくれますね。

河島 勉強や研究が第一優先で、交流会については忙しかったらまた次に来てくれればいいという感じだと思います。でも中には、「奨学金があってこそ日本で勉強が続けられる」といって、積極的に参加する人もいます。

—— 卒業生との繋がりということに関してはいかがでしょうか。

河島 これまでの卒業生について、事務局とは割とコンタクトがとれてますが、学生同士の横の繋がりがあまりとれていないという点は、ちょっと反省点ではあります。同窓会については中国と台湾にこちらが外向いて、現地にいる同窓生を集めてという形で一昨年あたりから行っています。台湾の場合ほとんどが台北にいるので集まりやすいですし、中国は上海でやりましたが、内モンゴルとかウイグルといった所からも来てくれましたね。

—— この20年間で奨学生の変化などは感じますか。

河島 一期生は17名でしたが、当時は中国、韓国の方が多かったですね。2001年、4期生を募集する頃ですが、新大久保駅で韓国人留学生がホームから落ちた日本人を助けようとして亡くなるという事故があり、その年は、先代の理事長の強い意向で韓国人をたくさん採用したということもありました。

設立当初は今よりも経済的に苦しい人が多かったように思います。毎朝アルバイトで駅のトイレ掃除をしてから研究室に行くという方もいました。国では医学部を出ていても、日本に来たらそういうアルバイトをしないと勉強ができないという方を支援していたという感じです。最近はそのままで苦労しているという方は少なくなりましたが、それも国によってまちまちで、今でも応募時には一銭もお金を持ってないという人はいます。

松本 最近はムスリムの人が増えてますね。インドネシア、シリア、イエメン、セネガル、スーダン…など。おかげでイスラム教のルールや、ムスリムに対する理解が深まりました。みなさん本当に深い信仰心を持っていることに凄いなと感心します。それでいて性格も明るい人が多く、日本人との違いを感じるがよくあります。

また、在学中に結婚する方がけっこういますね。途中で子供が出来るというケースもあって、奨学金だけでやっていけるの？と心配することもあります。

河島 日本では学生結婚は少ないですし、生活習慣や伝統的な考え方の違いと思いま



河島さん

すが、勉学を続けながら結婚し子供も持って、という人は偉いと思います。

留学生たちの東北震災ボランティア

—— 次に海外提携奨学金プログラムについて教えていただけますか。

河島 このプログラムについては、海外での活動も行おうということで始まったもので、現在米国の5つの大学および機関と提携を結んでいます。

松本 募集方法としてはそれぞれの機関で公募・選考をしてもらい、選ばれた候補者をこちらの奨学生選考委員会で追認するような形の選考方法になります。

河島 奨学金の使い方についてはいろいろ

で、ハワイ大学の場合、毎年4名を採用していますが、二人は日本の大学に、二人は日本からハワイに行くという交換留学制度に使っていただいています。コロンビア大学と南カリフォルニア大学は日本に関係のある研究をしている方ということで募集をしています。米国日本人医師会（JMSA：アメリカ在住の日本人の医療関係者、医学部生の方などが登録をされている団体）では大学を問わず日本人の医学部生ということで募集をしています。ニューヨーク日系人協会では主に東海岸の大学に通っている学生で日米に関する研究をしている人を募集しています。支給額はそれぞれトータルで年間30,000ドルなんですが、30,000ドルを1人に、というところもありますし、日系人協会のように毎年5-6人に支給しているところもあります。

——— 奨学金プログラム以外の活動も行っているそうですが、それについて教えてくださいいただけますか。

松本 2011年の東日本大震災で被災した学生への支援ということで、東北3県の6つの大学に寄附をしています。

河島 基本的には被災した学生への奨学金にしてくださいというのですが、壊れた寮の修復など他の使い方でも構わないということになっています。

松本 これまで5年支援してきましたが、あと5年くらいはやろうという話はしています。それから、岩手県立大学と一緒に陸前高田市の被災された方々に水を届けるボランティアを毎月やっています。4-5名

から多い時は10名くらいの奨学生が現地に行って、県立大の学生と一緒に水を仮設住宅で配っているんです。

河島 このボランティアのきっかけは震災後、私たちが岩手県立大学に震災の寄付金の申し出をしたことでした。当時大学では市役所で手付かずとなっていた各国からの支援物資を被災者に届けるという活動をされていたのですが、私たちがお声をかけたのがちょうど支援用の水が無くなった時で、伊藤園の人が来るのなら水を分けてもらえないかというお話をいただいたんです。それで持ち帰って理事長に相談したところ何百ケースか寄附をしましょうということになったのですが、その時、うちには留學生がたくさんいるので、希望者がいたらぜひ手伝わせて欲しいという話をさせていただきご快諾いただいたんですね。

松本 月1回行っていて、今まで通算では45回行っています。復興支援の必要がある間はずっとやりたいと思っています。

——— 留學生にとっては素晴らしい経験になっていると思いますが、毎月希望者が途切れることなくいるというのも素晴らしいですね。最後に財団のこれからについて、個人的なご希望なども含めてお聞かせいただけますか。

河島 今年の12月に20年目を迎え、OBも500人を超えました。年長者は50歳を超え、職業も大学の先生や研究者といった方が多いので、彼らが現役の奨学生に論文の書き方とか、先生との関係などの悩みについてアドバイスできるようなシステムを作りたい

本庄国際奨学財団
スタッフのみなさん
(背にした世界地図
には奨学生の出身地
にたくさんの印が記
されています)



いと考えています。財団に恩返しをしたいけど、モノで返す、お金で返すことは出来ないのです、そういう形で恩返しをしたいということを何人かのOBの方が言うてくれるようになりました。実際に交流会の時に偶然話をし、継続的にアドバイスをしているケースもあるようです。これをシステム化して出来ればいいなと思っています。今は奨学生と財団との関係ばかりなのですが、そういったシステムを作ることで現役生とOBとが繋がることも出来る、これまでとは違った展開も期待できるのではと思っています。

松本 今年で20周年を迎え、来年8月の19、20日には記念の国際シンポジウムを企画しています。まずそれがうまくいってくれればいいなと思っています。また、将来的に形は変わっても、財団の奨学生を増やしていくこと、一つでも多くの国から奨学生を採用していきたいという気持ちはあり

ます。

河島 理事長はオリンピック参加国の数を目指すと常々言っていますので、まだ奨学生を出していない国ということでは、待っているだけではなくてこちらからアプローチできないかなということも考えています。本庄正則は財団をつくるにあたって、アメリカのフルブライト(※)のようなものを目指するという思いを持っていましたが、私たちもそうした思いを大切に事業に取り組んでいきたいと考えています。

——— これからも日本と世界を繋ぐ学生たちのために、御財団の益々のご発展をお祈りしております。

※ フルブライト奨学金・・・アメリカ合衆国の大学院生や研究者を対象とした国際交換プログラム、および奨学金制度。1946年にJ・ウィリアム・フルブライトによって「世界各国の相互理解を高める目的」に設立された。現在51の委員会(Fulbright commissions(フルブライト委員会))と各国のアメリカ大使館、および協力機関により運営されている。

留学生の就活

JOB 博 CHINA で聞く 中国で求められる日本語人材

今や世界第2位の経済大国となった中国。その目覚ましい発展は、日本で学ぶ中国人留学生たちの就活にも大きな影響を見せ始めている。かつては日本留学後、日本で就職が彼らの理想とする道であったが、中国国内企業の魅力は年々高まっており、日本で学んだ成果を武器に、母国に戻るという道を積極的に選ぶ学生が増加してきているという。一方、中国の日系企業は内需が拡大する中国市場でビジネスチャンスを広げるため、日本での留学経験、就労経験のある優秀な中国人日本語人材を求めている。こうした双方のニーズを満たすために2014年から開催されているのが「JOB 博 CHINA」だ。11月19日（土）、東京・大手町のパソナ本社で行われた第4回JOB 博 CHINAには、中国の日系企業を中心に、グローバル企業、中国企業など計22社が出展、説明会と面談会を行った。

日本で学ぶ中国人留学生の母国リターン就活の現状はどうなっているのか。イベントの主催者であるパソナ グローバル事業本部マネージャーの岡山媛媛さんとパソナ上海董事長兼総経理の山本和範さんにお話をうかがった。

—— 今回はどのような企業が出展し、どのような求職者が来場されているのでしょうか。

山本 出展企業については主に中国の日系企業を対象としています。それらの企業が求める人材ということで、卒業後すぐ、もしくは2-3年日本で就労経験を積んで帰国したいという留学生の方と、今現在日本で就労しているけれど母国の日系企業に転職したいという方にご参加いただいています。

岡山 参加申込者の内訳は、2017年卒の方が5割、2018年卒の方が2割、残り3割が既卒の方で30歳以下の方が中心となっています。新卒者の場合、第一希望は日本での就職ですが、まだ内定をもらっていないので、母国に良い企業があれば帰ってもいいという方や、そもそも企業重視で選んでいるので働く場所は問わないという方も増えています。既卒の方の場合、数年間日本で働いたけど、そろそろ家族のいる中国に帰りたいという方、日本で学んだことを生かして母国でキャリアアップをしようという方もいます。

—— 中国は広大ですが、みなさん勤務地へのこだわりなどはあるのでしょうか。

岡山 中国の中でもっとも経済発展が進んだ場所ということで、上海を第一希望にあげる方が圧倒的に多いですね。一方で今回出展されている企業の勤務地については中国全土にわたるところもあれば、上海や北京といった大都市になるところ、日本でも中国でもなく、シンガポールに配属されるということもあります。

山本 みなさんいずれは親元に帰りたいと思っているわけですが、まず日本にいるより中国国内にいれば、何かあった時にすぐ駆けつけられるということで、中国国内の一般都市に仕事を見つけておきたいということです。そういった意味で沿海部の北京、上海、深淺、広州といったところは人気が高いわけですが、特に上海は最も日系企業が多い都市であり日本語を使うポジションも数多くあります。



岡山さんと山本さん

—— 日系企業における日本語

人材の重要性というのはかなり高いのでしょうか。

山本 現地化の促進がうたわれて4-5年経ちますが、まだ中国人が中国語で日系企業をマネジメントするという時代にはなっていません。日系企業の場合、駐在員の方が全従業員の5%~10%を占めていて、要所要所に日本人が配置され、その日本人を20%くらいの日本語に堪能な中国人スタッフが支える、という構造になっています。彼らは日本での就労経験や留学経験がある人たちで、中国法人の幹部層になっていくというケースが多いですね。なぜなら、日本企業の意思決定のプロセスというのは中国とは全く違い、そこには言葉だけではない、日本的なビジネス文化を心得ている中国人が求められるためです。また、日本語と日本文化を理解した方々を採用することで日本

人との中国人従業員との間のブリッジ人材にもなってもらえますし、ミッションや経営理念といったものも浸透しやすくなります。そうやって日系企業としては中国オペレーションを進めていこうということなのだと思います。

—— 日本企業の中にも英語を公用語とするところが出てきていますが、中国ではいかがでしょうか。

山本 大手の商社などで英語を公用語としている所もあります。しかし中国全体で見ると英語を公用語としているところは10%、15%くらいでしょうか。多くの日系企業では日本語が公用語になっています。

学生
の声

Kさん 男性 国立大学大学院修士2年 経営学専攻

私はコンサルティングに関する会社を探しています。今日は面接もしましたが手応えとしては難しいかな。日本にいる間に中国にある企業の内定をもらえればと思っています。中国は今、伝統企業がデジタル化を進めている段階なので、中国でコンサルティング系の企業に入れば自分の力を生かせるのではと考えています。実は日本でも就活をしてIT企業から内定をもらっています。でも中国で良いチャンスがあれば、待遇面などを比較してみたいと思っています。



—— 待遇面について、日本の本社採用と比べた場合どうなのでしょう。

山本 新卒者ということで比較すると、日本採用のほうが給与条件はいいですね。ただやはりすぐに母国で働くことが出来るというメリットを重視し、そこは妥協されているようです。

岡山 中国の給与水準は年々伸びていますし、40歳くらいになると日本とほぼ同じになります。部長クラスだと、むしろ中国のほうが高くなってきています。福利厚生面も現在は各社とても充実していますので、以前のような差はなくなっていると思います。

—— 現地法人の採用活動に関しては、日本の本社も関わっているのでしょうか。

山本 本社がこういった就職イベントに参

加して優秀な人材を採用し、日本で研修してから現地に送り込むといったことを積極的にやられている企業も見受けられます。そこは企業の中国市場に対する本気度、取り組み方が、そのまま採用にも現れていると感じています。

—— 中国での日系企業の活動は最近どのような傾向にあるのでしょうか。

山本 最近では中国を販売市場として位置づける企業が増えています。メーカーは昔から進出しているのですが、最近の特徴として、コンサルティング会社などのプロフェッショナルなサービスやインターネット広告などを手がけるIT系の会社が伸びてきています。また、飲食やスーパー銭湯などエンターテインメント系の進出も増えています。中国経済は景気が悪いといったことを言われていますが、内需は拡大しており消費者の購買意欲は高いので、そこをしっかりと開拓していこうという思いはどの日系企業も持っているのだと思います。

—— 文系理系を問わず需要があるということですね。

山本 文系理系を問わず幅広い職種で求人はありますが、中国全体を見て足りていな

いと言えるのは、日本語が喋れる工学系、技術系の方ですね。営業職などの文系人材についてはある程度いますが、日本語ができる理系人材ということになると、なかなか見つからないというのが

学生 Nさん 女性 国立大学大学院修士2年 繊維学専攻

の声 中国にいれば家族や親戚、友人にすぐ会えるので帰国を希望しています。今日は大手日系自動車メーカー2社の面接を受けました。品質管理部門があって自分の専門に近いので、自分の知識が生かせると思っています。1社は面接官の印象がとても良かったので、期待しています。ただ、もし自分の学んだことが生かせて、将来中国に行けるような良い企業があれば、日本で就職しても構いません。今は日本と中国、両方の企業の話の聴いているところです。

現状です。

—— 求職する側はどのような企業を希望するのでしょう。

山本 やはり大手志向は強いですね。今回は日系企業のほかにグローバル企業のデロイトや中国系のアリババも出展されていて、学生からは人気がありますね。

岡山 今、中国政府は中国企業の海外進出を促しており、中国で成功して資金力のある会社は次の進出先として日本に大変注目しています。ですから中国企業の場合、これから日本でビジネスを立ち上げる、また日本でのサービスやマーケットシェアをもっと増やしたいと考えていて、そのための日本語人材を採用したいということです。

—— 今回のJOB博CHINAに対する反響はいかがでしょう。

岡山 JOB博CHINAは今回で4回目ですが、前回(2015年11月)7社だった出展企業は今回22社に、参加者も200名から600名にと、ともに3倍に増えました。企業側、人材側ともにニーズが増しているということです。私もそうでしたが、昔は日本留学後、日本就職が第一希望という方が圧倒的に多かったのですが、今は帰ってもよい、帰りたいという方が増えて分散しています。大学のキャリアセンターではそういった方の就職サポートは難しく、私たちのところに相談に来られるケースもあります。OBの方が現地で後輩の面倒を見ているそうですが、限界があるということですね。

山本 帰国して就職する方の場合、大学として卒業後の進路が掴めないということが多いです。しかし大学が帰国就職を希望する学生のことまでケアできたら、それは学生にも喜

ばれ、大学の評価にも繋がります。

—— 会場は参加者のみなさんの熱気で溢れていました。

岡山 今回、大手の様々な業界の会社に出展いただいていますし、加えて私たちが帰国就職に関する基本的な知識についてのセミナーや個別相談会を開催しているので、参加者のみなさんには満足していただいていると思います。何より日本にいながら内定がもらえるというのは求職者にとってとても大きなメリットです。特に大都市出身でない方は、帰国といってもどこに戻ればいいのかわかりません。田舎に帰ってしまったら就職活動もできません。日本で中国での就職先を決められれば、新しい生活のための準備もしやすいです。

山本 4-5年日本で生活していると、日本のことは知っているけど中国の状況は知らないという方が多く、みなさん情報にはすごく飢えています。ですからセミナーや相談会では中国の賃金の仕組みや相場、税金や社会保険はどのくらい引かれるのかといった質問が多かったですね。

—— 貴重なお話、ありがとうございます。

取材協力：(株)パソナグループ広報室

パソナ上海

中国上海市淮海中路222号力宝広場910室
TEL 021-5382-8210
E-mail sh@pasona.com.cn
URL <https://www.pasona.com.cn>

パソナ グローバル事業本部

東京都千代田区大手町2-6-4
TEL 03-6734-1270
URL <http://www.pasona-global.com/gl/>

留学生インタビュー



ヌンさん

ソンさん

ターさん

TNI から ABK へ



タイ 3人娘の日本留学

本誌連載コラムでもお馴染みの泰日工業大学 (TNI)。元日本留学生たちによって2007年に設立された TNI では日本語はもちろん日本式経営、ものづくりを中心とした教育が行われ、毎年多くの卒業生を日系企業を中心としたタイの産業界に送り出し高い評価を得ている。その TNI を今年卒業し、ABK 学館日本語学校 (ABK カレッジ) に留学したのは計16人。彼らはなぜ日本に興味を持ち、今日本でどんなことを考えながら留学生活を送っているのか。THANUCHAVIWAT SASITHON (ヌン) さん、SASIPRAPA (ソン) さん姉妹と RAKSACHAT METHITA (ター) さんの3人に TNI の思い出なども交えて語ってもらいました。

日本への関心と TNI 入学

編集部：ヌンさんとソンさんは日本語を学び始めたきっかけは同じですか。

ヌン：はい。母の友達が日本人と結婚していて、普段は日本に住んでいるのですが、

よくタイに遊びに来て家族同士で付き合いがあったんです。それで子供の頃よくその家の子と遊んでいたのですが、その時日本語や日本の音楽を教えてもらったのが、日本に興味を持ったきっかけですね。7歳くらいでしたが、ひらがなを書いてみたり、ジャ

ニーズの曲を聴くようになったりしました。

ソン： それで高校では外国語の授業に日本語を選択して勉強を続けました。大学ではもっと本格的に日本語を勉強したいと思ったんです。

編集部： 日本語を専攻できる大学は他にもありますが、進学先にTNIを選んだのはどうしてですか？

ヌン： 私たちは経営についても興味があって、学んでみたいと思っていたので、それじゃあ経営と日本語と両方一緒に学べる大学はないかと考えて、TNIへ入学することに決めました。

編集部： ターさんはどうですか？

ター： 私が日本について興味を持ったのは14歳くらいの時で、ラジオでWAT（ワット）という日本の歌手の歌を聴いたことがきっかけです。メロディーと歌声に魅かれて、日本語を理解したいと思ったんです。それで高校の外国語の授業では日本語を選択して週に4日、日本語の授業を受けていました。大学ではもっと本格的に日本語を学ぼうと思ったのですが、それだけでなく他の専門的な分野についても学びたいと思いTNIを選びました。

編集部： 大学で専門分野を2つ学ぶというのは大変ではなかったですか？

ヌン： 大変でしたけど、両方とも好きなことでしたから苦にはなりませんでした。むしろとても中身の濃い勉強が出来たと思います。

ソン： TNIでは3年生のとき、学んだことを生かして自分たちで実際にビジネスを試してみるのですが、それは他の大学にはないTNIの特徴ですね。自分たちでお金を投

資して利益をあげなければいけないのですが、とてもいい経験になりました。

ター： 7-8人のグループで会社を作り、ものづくりをしてそれを販売するんです。

ヌン： 私たちは鞆とスカーフを製造して売りました。自分たちでデザインをした鞆とスカーフを工場と相談して生産し、販売用のウェブサイトを立ち上げてそこで売ったんです。それぞれ100個作りましたが、全部売り切りました。

ター： 私たちはクッキーのビジネスです。クッキー作りが上手な友達がメンバーにいたので、みんなで特別な味を考えて、それを私の家で製造し、市場にお店を借りて売りました。

編集部： 楽しそうですね。他にTNIらしい授業はありますか。

ソン： 経営の授業の中には日本人の先生が日本語で教えるというのがありますが、こうした授業はTNIらしいと思います。

ター： 日本企業が実践している五ゲン主義（現場、現物、現実、原理、原則）について学んだり、授業は新鮮で楽しかったです。

編集部： 大学の雰囲気などはどうですか。

ター： 小さい大学ですから学校の中は家族のような雰囲気なんです。

ヌン： 何か問題があってもすぐに気軽に先生に相談できるという空気があります。

ソン： 他の大学は学部で分断されていて、この学部はこの先生が管理するといった感じなのですが、TNIは学生数が少ないのでそういう隔たりはなく、全ての先生が全ての学生の面倒を見ているという感じです。

ヌン： 普通は学部が違うと友達になることはあまりないのですが、TNIではお昼ご

飯もみんな同じ場所で食べますから、キャンパスにいる学生みんなが友達という感じでした。

編集部： 学問以外で学んだ日本スタイルはありますか。

ソン： ありますよ。例えば「ゼロレイト (zero late)」といって、遅刻を無くそうという取り組みを大学全体でやっています。遅刻が3回だと欠席になるんです。欠席が増えると大きなテストに参加できないなど成績に影響してきますから、みんな真剣に遅刻をしないように努力するんです。

ヌン： 時間を守ることの大切さを教えてくれましたね。それに比べるとタイの普通の学校は楽です。いつもリラックスしている感じです。

ター： タイは高校でも遅刻は問題ありません。時々授業の前にみんなでお菓子を食べながらお喋りして、遅れて授業に参加することもあります。

ヌン： 10分遅れても大丈夫ですね (笑)

編集部： ではゼロレイトはみなさん辛くはなかったですか？

3人： 楽しかったです。

ター： 朝起きて時計を見て、慌てて学校に行くのはちょっとゲームみたいで楽しかったですね。

ヌン： 就職についても、日系企業で働きたい人がいると大学がいつでも会社にコンタクトをとってくれますし、ジョブフェアといって100社近い日系企業が大学に来てブースを出す合同説明会もあります。他の大学ではそういうことはないですね。ですから将来日本企業に就職したいと思っている人や、日本留学を考えている人にとって

TNIはお勧めの大学です。

日本留学とABKカレッジ

編集部： では初めて日本に来た時のことを教えてもらえますか。

ヌン： 私たちが初めて日本に来たのは高校1年生の時です。学校の短期研修プログラムで姫路の姉妹校に1週間ほど来ました。その時ホームステイをしたのですが、ホストファミリーがとっても優しく、何かできないことがあるとゆっくり教えてくれて、一生懸命手伝ってくれました。その時日本人が大好きになりました。

ソン： 姫路は山がとってもきれいで、生活もゆっくりした感じで、その後東京の高校にも行ったのですが、全然違いましたね。

ター： 私が初めて日本に来たのは高校1年生の時で、友達と友達のお父さんと一緒にディズニーランドなど、東京を旅行しました。最初に思ったのは、この国はとってもきれい！ということ。ゴミは落ちてないし、季節は秋で、気候がとっても良くて木が紅葉していて…。感動しました。

編集部： では具体的に日本に長期留学することを考えたのはいつ頃ですか。

ヌン： 私は2014年の大学3年生の時にABKカレッジに2か月間短期留学したのですが、帰国してすぐ、卒業したらABKに留学しようと決めました。理由はまず2か月間だけなのに思った以上に日本語力がアップしたことを実感できたからです。それからその時私は東京中いろいろな所に出かけましたが、中でも原宿や渋谷がすごく気に入って毎日のように通っていました。

そこで東京のファッション文化を体験して、私は経営と日本語が好きだけど、じゃあ将来何をやりたいのかと考えた時、それはファッションのことだと思ったんです。日本には四季がありますが、タイは1年を通して暑いのでファッションも1年中同じような感じです。



だから日本に来て、ファッ

ションってこんなに素敵なんだということに気付いたんですね。

ソン： 私はとにかく日本人のように日本語を話したいと思って留学を決めました。タイでも日本語は勉強できますが、日本にいれば周りは全て日本語ですから、タイで学ぶよりずっと実力がつくと思ったんです。ABK カレッジを選んだのは短期留学がとても楽しかったから。もっとここで学びたいと思いました。

ター： 私はずっと、もっと日本語が上手になりたい、将来は日本で働きたいと思っていたのですが、去年の10月にABKの奨学生試験を受けられるチャンスがあって、チャレンジしてみたら合格できました。

編集部： ABKカレッジの感想を教えてください。

ヌン： 先生はとっても優しいですね。就職先を探す時もとても丁寧に手伝ってくれます。この会社はちょっと興味がないと言うと、「無理なら大丈夫、ほかの会社をがんばって探しましょう」って。心の温かさが伝わってくるんです。

ソン： 私たち、思わずタイ語で「お母さん！」って呼んでしまうのですが、それくらい、いつも親身に私たちの相談に乗ってくれます。

ター： 時々、この会社は面接したくないと我がまを言ってしまうのですが、そんな時も「いいですよ、あなたの将来だからゆっくり考えてね」って。本当に優しいです。

編集部： 3人とも同じクラスですがクラスメートはどうですか。

ター： クラスは23人で、みんな面白いです。

ヌン： ベトナム、中国、台湾、香港、イエメン…。インドネシアの人のことは「お父さん」って呼んでるんです。彼はいつも美味しいお店を探していて、いいお店が見つかるみんなを連れて行ってくれるんです(笑)。

編集部： では後輩にも日本留学、特にABKはお勧めですね。

ヌン： はい。実は今もABKに留学したいという後輩たちから相談を受けているんです。ABKにはいろいろな国の生徒がいます

が、先生や職員のみなさんは、それぞれの国の文化の違いを理解し対応しようとしてくれています。その気持ちが伝わってくるので、嬉しいんです。

ソン： 学校と寮の環境はとても良いですね。安全で買い物にも便利です。後輩にも勧めています。

ヌン： なぜABKがTNIで人気があるのかというと、たまに説明会で来る校長先生がとても優しく、それで雰囲気がいいからなんです。ほかの学校の校長先生も来ますが、ちょっと冷たい感じがします。

編集部： 説明会での校長先生の印象って大きいんですね。

ソン： タイ人は優しい人が好きですから、みんなはこの人が校長先生の学校に行ってみたいと思うんです。本当に先生の雰囲気は大切です。タイ人は先生が優しい、温かい人なら、安心してその学校に通えると思うんです。

人に優しいタイ社会

編集部： 3人は就職活動をされているようですが、どんな会社を探していますか。

ター： 私の趣味はブログを書くことで、文章を作ることが好きですから、日本の出版社で仕事をしたいと思っていましたが、タイ人を探している出版社というのはなかなか無いですね。でも最近タイ関係の雑誌を作っている会社の求人を見つけたので、そこに履歴書を出してみるつもりです。

ヌン： タイ人が欲しい会社というのは自動車系などのメーカーが多いですね。私たちはファッション関係の会社を探していた

のですが、なかなか見つからなくて、最近両親に相談をしたら大学院に行くことを勧められました。

ソン： それで、ファッション関係の研究ができる大学院に入ることを考えています。ファッション関係の会社に話を聞くと、まずお店で1~2年アルバイトをして、認められたら正社員として採用、というところが多いので、大学院に入ったら、お店でアルバイトをして経験を積んで、社員を目指せればと思っています。

編集部： 実際に東京で生活してみると、楽しいことばかりではないと思いますが、嫌なことなどはありませんか。

ソン： 東京の日本人は外国人に対してみんな冷たい感じがします。

ヌン： 学校では先生も職員もみんな優しいのですが、学校を出ると違う世界になりますね。特に若者は感じが良くない人が多いです。

ソン： タイはバスの中では、女性やお年寄りに男性が席を譲るのですが、日本の男性は気にしないですね。

ヌン： 一時帰国の時、大きな荷物を持って電車に乗り込もうとしたら、日本人の若者に「面倒くせえなあ」と言われました。私はがっかりしました。それにスーツケースがとても重くて駅の階段で苦勞しているのに誰も手伝ってくれません。タイに帰ると、必ず誰かが「重いですか？持ちましょうか？」って声をかけてくれます。

編集部： タイではバンコクのような都会でも男性が女性に席を譲るのは当たり前ですか？

ソン： 譲らなかつたらみんなから冷たい

目で見られます (笑)。

編集部： 女性というだけで席を譲ると、日本ではちょっと驚かれるかもしれませんね。

ヌン： もちろん親切な人もいます。以前新宿でアルバイトに行く時に道に迷っていたら、自動翻訳機を持ったおばあさんが近づいてきて、その機械で「Can I help you?」って話しかけてきたんです。それで私がここに行きたいと住所を見せると、私の手をつかんでその場所まで連れて行ってくれました。びっくりしたのですが、とても嬉しかったです。

編集部： 翻訳機を持ったおばあちゃんですか！？ 困っている外国の人を助けるのが好きなのかもしれませんね。

ター： 私は普段の生活で特別いやなことはないのですが、アルバイト先が新大久保で外国人が多いので、夜帰宅時に声をかけられたりして、ちょっと怖いなあと思います。でも逆に (ABK のある) 巢鴨や駒込駅で降りると、ここは静かに暮らす場所という感じで、凄くホッとします。

ヌン： 私の周りはいいい人ばかりですから、たまに冷たい人と出会っても、それは知らない人ですから気になりません。それよりも日本のファッション業界で働きたい、働けたら幸せだという思いが強いです。

編集部： 他に日本に住んでみてわかったタイの素晴らしいところを教えてください。

ヌン： タイ人はみんなが家族みたいです。例えば日本のお店では、お客さん、店員さんの関係ですが、タイだとクンナー (おばさん)、クンピー (お兄さん、お姉さん)、クンヤイ (おばあちゃん) って、どこに行っ



てもみんな家族みたいに呼び合います。だからタイは居心地が良くて寂しさを感じません。それからタイの文化はとてもきれいだと思います。古いお寺やソクラーン (灯籠流し)、ロイカトーン (水掛け祭) などの伝統行事と人々の生活が密着していて、それは素晴らしいことだと思います。

ソン： 屋台も素晴らしくて便利な文化になって改めて思います。外に出れば24時間いつでも安くて美味しい食事ができますから。

編集部： 本当に食事は羨ましいですね。

ター： 初めて日本に来たときは、パンに150円の値札が付いているのを見て「えーっ！高い」って、驚いたんですが、今は安いかなって思えるようになりました。果物もタイは安いのでいつでも好きなだけ食べられますね。でも一番特別なことは街も人も雰囲気が良いということですね。

ヌン： 私たちのクラスの友達は、「どうしてタイ人はいつも笑顔なの？」って聞いてくるんです。

ター： 私たちは、自分たちがいつも笑顔でいるように思われているっていうことが不思議でした。文化が違うんだなあって思います。

ソン： どうして私たちがいつも笑顔でいられるのか、それは私たちにもわからないです（笑）。

日本の良いところと将来

編集部： ではみなさんにとってタイより日本が良いところはなんでしょう。

ヌン： 日本は安全ですし、社会のシステムが素晴らしいです。タイは規則にゆるいというか、そのため犯罪も多いです。大学の周辺でもみんなとても気を付けていて、特に夜は友達と一緒に行動して早く寮や家に帰るようにしています。友達とたくさん歩いていれば大丈夫ですが、一人だととても危ないです。

ター： 野良犬がたくさんいて、大抵は寝てばかりですが、中には危ない犬もいますね。

ヌン： 渋滞も問題ですね。タイはいつも渋滞してるので遅刻にも寛容になってしまってます。日本はバスも時間通りに来ますから、予定通りに動け約束も守れますね。

ター： 電車やバスだけでどこにでも行けるというのは素晴らしいです。バンコクの私の家は都心からちょっと遠いのですが、近くにはバスも通っていませんし、バイクタクシーもありません。だから車だけが頼りなのですが、私は運転できないので自分

で移動することができません。

編集部： 日本ではそういう所では自転車を利用しますね。

ター： 自転車もありますが、タイの道路は自転車が走ることを考えて作られていませんから、とても危ないですね。だからほとんど使いません。

ヌン： 結局みんなが自分の車を持って、それで渋滞になってしまう。

ター： 東京の、朝夕の電車の混雑は凄いけど、でも便利なのはいいことです。

ヌン： 混んでいる電車に乗るときは後ろ向きに乗ってホストファミリーに教わりました（笑）。

編集部： みなさんいろいろと東京で生活していく手段は身に付けたようですね。最後に将来の夢を教えてください。

ソン： ヌンさんと一緒にタイにファッション関係の会社を作りたいです。

ヌン： タイでは日本や韓国、中国の服も生産していますが、タイのブランドというのはあまりありません。ですからいつかはタイで自分のブランドを作り、タイのブランドイメージを作りたい。もちろん経営には日本スタイルを取り入れます。

ター： 私はしばらく日本で生活をして良い経験を積みたいと思っています。いま、日本に来て7か月ですが、外国で初めて一人暮らしを経験して、いろいろなことができるようになり、自信ができました。次は社会に出て、少なくとも5年くらいは日本で仕事の経験を積みたいと思っています。

編集部： みなさん身体に気を付けて、将来の目標に向けて歩いていただければと思います。

バンコクの泰日工業大学で活躍するスタッフ&先生によるリレーエッセイ

泰日工業大学 (TNI) 奮闘記

⑩ 2016 年度卒業式と日本で働く TNI 生 水谷光一

2016 年度卒業式が行われる

2016年11月13日、バンコク東の郊外にあるラーマ9世国王陛下記念公園（タイ語：スワンルアン・ロー9）で、2016年度卒業式が行われた。おりしも10月13日に国王陛下がご逝去され、会場に関して再考した方がいいのではという意見もあったが、TNIが立派になったことを国王陛下にご報告した方がいいということになり、会場は予定通りとなった。

2012年に入学し、このほど卒業証書を手にした学生は学部卒業生 633人。大学院卒業生 73人、合計 706人であった。

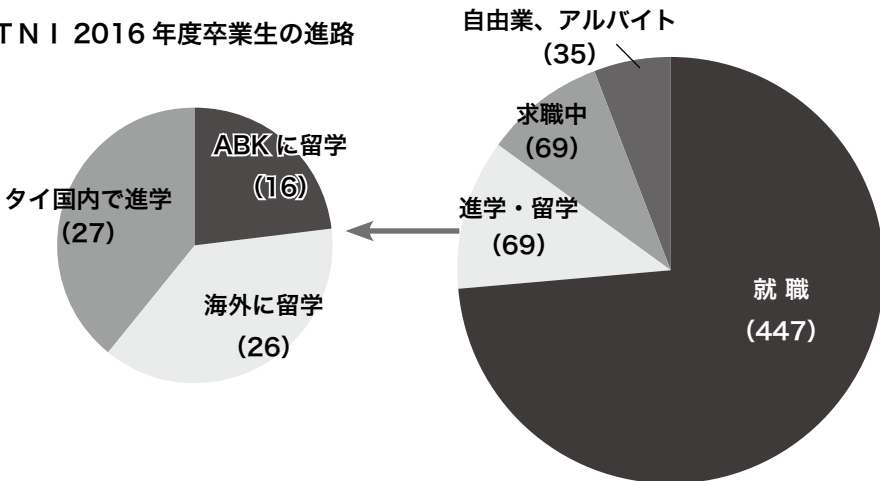
2012年に入学した学部生は（学生登録ベ-

ス）964人いるので、4年ストレートで卒業した学部生は約66%ということになる。TNIだけでなく、タイで大学を卒業するにはそれだけしっかりとした勉強をしなければならないということである。（ちなみに大学院生は73/164名で44.5%）

特に2012年は前年の大洪水の被害もあり、入学生が落ち込んだ年でもあった。当時は日本企業がタイから逃げ出すという流言があり、日本企業への将来性が揺らいでいた。にもかかわらずこの年に入学してくれた学生には感謝したい。

今年の学部卒業生 633人の進路を現在の段階（進路調査が可能だった607名）で見ても

TNI 2016 年度卒業生の進路





2016年度TNI卒業式の様子



ると、タイ、国外を問わず進学しているもの69名(内ABK16名)、就職をした者447名(約73%)、求職中の者56名、アルバイト・フリーランスなど35名であった。就職した者の中で約30%(131人)が生産業であった。

卒業生を訪ねて、日本へ

10月4日から学長と日本に出張した。東洋大学と上智大学(共に東京都)で大学研究室交流協定を締結し、10日にものづくり大

学(埼玉県)、11日に滋賀大学、立命館大学情報理工学部(共に滋賀県)を訪問し、その後トヨタの内山田竹志(一社)日・タイ経済協力協会(JTECS)会長を訪ねるために名古屋を訪問した。

その際、せっかくなので名古屋で働いているTNI卒業生に会いたいと、チャーコーン君(日本名 川神勉君)に連絡を取り、会うことが出来た。勉君はTNI在学時代から何事にも積極的で様々なイベントを手伝ってくれていた。2011年に卒業すると同時に日本で



名古屋地域で働く TNI 卒業生たち
(右から3人目が勉くん)

就職をし、金型の会社、食品業などを経て現在はエアコンの効率を上げる省エネ製品の販売をしている。

在学中から勉君の日本語能力は相当なものであったが、日本で働き始めた当初はなかなか日本の企業文化、働き方に馴染めず、努力が必要だったようだ。タイ人としての名前を名刺に刷るのではなく、あえて日本名を使い（この名前は子供の頃ご両親が考えたとのこと）顧客からは日本人と同様に扱ってもらい、外国人社員であるという甘えを退けたという。おかげで今では経営者からも信用を得て、タイ向けの営業だけでなく、日本人とまったく同じ任務に就いてがんばっている。

勉君が TNI に進学を決めたとき、必ずしも両親は賛成ではなかったらしい。しかし高校の時に見た日本映画の影響を受けて、日本が心底好きになったという勉くんは、迷うことなく TNI へ進学、日々日本語と日本式ビジネスに関する知識を深めていった。そして当然のごとく、旅行だけではなく日本に暮らし、日本社会で働き、日本人

と接して見たいと思うようになった。勉君の会社のエアコン効率を上げる部材はすでにタイにも輸出され、タイのコンビニでも採用される兆しがあるようだ。日本での生活は苦しいことも少なくないが、自分の姿を見て、時として内向きになるタイ人の友だちにもがんばって欲しいと思っている。

勉君も全て把握しているわけではないが、日本人と同様に採用された者、タイの法人から派遣されている者など約10名の TNI 卒業生が名古屋周辺で就職し暮らしているらしい。勉くんは、「日本で働くコツはタイ人の仲間ばかりと付き合っているのはだめ。積極的に日本人の中に入って行き、一緒に働き、日本人の行動と信条を理解すること」だと話してくれた。

彼にはさらなる夢があるそうで、それを目標に日々がんばっている。その目標とは…いつか目処が付いたときに教えてくれるそうで、楽しみにしている。

水谷光一 1988年渡タイ。1990年から TPA 日本語教師。96年から TPA 国際業務職員。99-05年まで日本帰国、ABK 勤務。05年に TNI のプロジェクトに参加する決心で再びタイに！



卒業式で学生、先生方と（右端が筆者）

ABK is My Home

最近の来館者たち



◀ インドの Mr. M. R. Ranganathan (元 ABK 同窓会研修生 1972/7-1973/1 他、ABK-AOTS タミルナド同窓会創設者・現会長) とお孫さん (2016/10 立命館太平洋大学に留学のため来日) 来館 〈2016/9/13〉



▶ 韓国の Mr. Wang Dai Youl (元 ABK 同窓会 研修生 1982-84) ご夫妻来館 〈2016/9/15〉



◀ メキシコの Mr. Ishidro Hurtado Soto (元 AOTS 研修生 1975/3-1976/9) ご 夫妻来館 〈2016/9/30〉



▲ (一財) 海外産業人材育成協会 (HIDA、旧 AOTS) は「ものづくり人材大使」制度を創設し、その第1号としてタイの ABK-AOTS タイ同窓会 Suchai Pongpakpien 会長、泰日工業大学 (TNI) Supong Chayutsahakij 理事長、Bandhit Rojarayanont TNI 学長の3名が世耕経済産業大臣隣席の下任命された。任命後の、当会館に立ち寄り懇談。(前列向かって左から Bhandit TNI 学長、Supong TNI 理事長、Suchai ABK-AOTS タイ同窓会会長、小木曾当財団理事長) <2016/10/14>



◀ インドの Mr. C. S. Raghavan (AAWI (AOTS/HIDA ALUMNI ASSOCIATION OF WESTERN INDIA) の役員) 来館。ABK 同窓生募金寄付者芳名録ボードのトップにある A.A.W.I.(AOTS Alumni Assoc. of Western India) を指さし、撮影 <2016/10/18>

▶ 泰日工業大学 (TNI) Supong 理事長との歓迎懇談会 <2014/10/15>





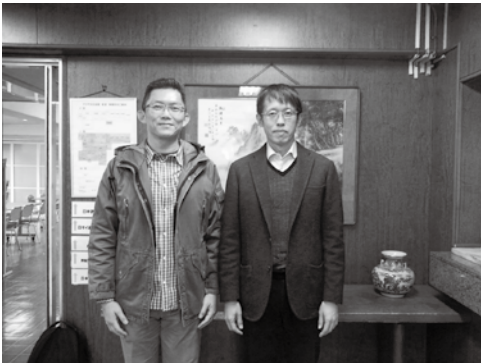
◀ 香港理工大学副学長一行4名、都立小石川中等教育学校で大学紹介・教員と交流後、ABK訪問 (2016/10/25)



▲ ABK-AOTS タイ同窓会役員の Dr. Datchakorn Tancharoen (Mr.) 来館 (2016/11/1)



▲ マレーシアの梁至揚さん (元 ABK 日本語コース生 2001/10-2003/3) 来館 (2016/11/5)



▲ マレーシアの林維仁さん (元 ABK 日本語コース生 1996/4-1997/3) 来館 (2016/11/7)



▲ タイの Mr.Boonak Charoenkoop (元 AOTS 研修生 1964-1965) ご夫妻来館 (2016/11/14)

最近の来館者たち

ABK 日本語コース4期生同窓会開催



2016年10月3日、1986年～1987年のABK日本語コース4期生の有志が東京に集まり巣鴨で同窓会を開きました。マレーシア、中国、米国、日本に在住のマレーシア、台湾の元留学生です。日本語のクラス担任をはじめとした先生、先輩、職員等が招待され、しばし昔に戻り旧交を温めあつという間の2時間、大変楽しく過ごしました。(Mr. Tan See Seng、Ms. Teoh Eng Chooi、Ms. Yong Cheng Yuen、Ms. Lai Peck Lung、Mr. & Mrs. Ong Ka Sengさんとお嬢さん、Ms. 鍾文婷(中川翔詠)、Ms. 汪瑜雯)



奨学金情報

※ 奨学金情報は Japan Study Support のホームページよりご覧いただけます (<http://www.jpss.jp/ja/>)

■ 岩谷国際留学生奨学助成

- **対象**：(1) 日本以外の国籍を有し、中国、韓国、モンゴル、台湾、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナムから修学または研究のために来日している私費留学生 (2) 大学院の修士課程および博士課程の在籍者、または入学決定者並びに博士課程3年終了者で博士學位取得のための継続在籍者 (3) 自然科学系および関連する学際分野 (①工学、理学および農学の全般 ②医学部の一部…分子病態学、公衆衛生学のみ ③薬学部の一部…分子微生物学のみ) を専攻している者 (4) 平成29年4月1日時点の年齢が修士課程は満30歳未満、博士課程は満35歳未満の者 (5) 平成29年4月以降、他からの奨学金を受けない者 (6) 年5回開催する奨学生例会 (うち1回は2泊3日の研修旅行) に参加できる者 (7) 奨学金支給終了後も当財団と通信等を継続する意志のある者 (8) 国際交流と親善に貢献しうる者 (9) 日本語で日常の会話ができる者
- **奨学金**：月額150,000円 (別途、学会発

表のための旅費などを補助する)

- **支給期間**：原則1年間
- **採用人数**：15人
- **応募方法**：必要書類を用意し財団に提出する (必要書類については実施団体ホームページを参照)
- **募集期間**：12月1日 (木) ~ 12月20日 (火) (当日消印有効)
- **実施団体・問合せ先**：
公益財団法人 岩谷直治記念財団
〒104-0028 東京都中央区八重洲2-4-11 八重洲h+ビル3階
TEL：03-6225-2400
FAX：03-3231-7070
E-mail：haga@iwatani.co.jp
information@iwatani-foundation.or.jp
URL：http://www.iwatani-foundation.or.jp/

■ 日中医学協会 2017年度助成募集

- **募集項目**：(A) 調査・協同研究助成
 (B) 若手在留中国人研究者助成
- **助成領域**：基礎医学・薬学
- **助成対象**：A) わが国の研究者が中国の研究者と共同で実施する調査・研究活動 B) 中国の医療の向上に貢献する意思と能力を持ち、わが国の研究機関に在籍して研究指導を受けている若手中国人研究者に対する助成。かつ次の条件を満たすこと。(1) 募集締切日2017年1月13日時点の年齢が35歳以下であること。(2) 大学院修士課程並びに博士課程在籍者および進学予定者も含みます。(3) 助成金給付後の研究・研修または留学期間が2年以上であること。
- **助成金額**：A) 1件につき年額最大100万円(若干名) B) 1件につき年額40万円(2名)

- **応募期間**：2016年12月1日～2017年1月13日
- **応募方法**：(1) 日本の研究機関・医療機関在籍者が申請を行う。(2) 申請書は実施団体ホームページからダウンロードし、作成する。(3) 応募に関する詳しい情報は実施団体ホームページで確認。
- **実施団体・問合せ先**：
 公益財団法人 日中医学協会
 〒101-0032 東京都千代田区若本町1-4-3
 住泉 KMビル6F
 TEL：03-5829-9123
 FAX：03-3866-9080
 E-mail：jyosei@jpcnma.or.jp
 URL：http://www.jpcnma.or.jp

イベント情報

■ 第36回からいも交流・春 ホームステイ参加者募集

「からいも交流」は、ホームステイの約2週間、学生さんはホストファミリーの仕事を手伝ったり、地域の交流に参加したり、田舎生活をともにする中で、観光旅行では得られない、本当の相互理解や生涯の友人を作る手助けをします。

実施期間：① 2週間プラン…2017年3月11日(土)～3月26日(日)

② 1週間プラン…2017年3月19日(日)～3月26日(日) (先着10名)

参加費：① 40,000円(鹿児島集合、交通費を含まず)

② 30,000円(鹿児島集合、交通費を含まず)

滞在先：南九州の一般家庭

募集人数：60名/先着順

申込方法：主催者ホームページで確認

申込締切：2017年1月15日(日)

主催：特定非営利活動法人 からいも交流

かごしまけんきりしましふくやまちょうふくやま

鹿児島県霧島市福山町福山 5290-66

でんわ
電話：0995-64-7751 FAX：0995-64-7755

E-mail：karaimo@po.synapse.ne.jp

ホームページ <http://www5.synapse.ne.jp/karaimo/>

Photo News



ABK 千石寮で防災説明会開催

2016/11/16 (水) 午後、アジア学生文化協会 (ABK) 千石寮での初めての防災説明会を行いました。千石寮は2014年に開設され、現在13名のベトナム人留学生が生活をしています。

MEMBERS

〈会費とご寄附の報告〉

2016年8月

特別会員

- (3口)
(一財) 海外産業人材育成協会 足立区
(1口)
株式会社 InfoDeliver 港区

賛助会員

- (株) 日吉 近江八幡市
服部 泰子 豊田市

正会員

- (1口)
井上 美和子 文京区
豊島 由久 所沢市
藤原 一枝 武蔵野市

- 代田 泰彦/ますよ 所沢市
稲垣 史 足立区
小倉 美恵子 川崎市
豊島 正大 横浜市
近藤 玲子 秩父市
竹田 繁 南陽市
岩井 秀生 入間市

ご寄附

- 大島 雅子 千代田区
稲垣 史 足立区
酒井 杏郎 渋谷区

2016年9月

特別会員

- (1口)
立命館アジア太平洋大学 別府市
今西 淳子 文京区
日本シグマックス(株) 新宿区

賛助会員

- (1口)
昭和西川(株) 中央区
亜細亜大学 武蔵野市

正会員

- (1口)
山田 裕子 三鷹市
大里 浩秋 逗子市
宮原 彬 朝霞市
竹林 惟允 練馬区
稲澤 宏一 新宿区
鶴田 純一/由美 千葉市
寺尾 方孝/三枝子 国分寺市

ご寄附

- 竹林 惟允 練馬区
鶴田 純一/由美 千葉市

皆様の暖かい御支援に感謝申し上げます

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名称：公益財団法人アジア学生文化協会
ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長 小木曾 友

設立：1957年(昭和32年)9月18日
故穂積五一氏創設

目的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◆主な事業◆

- (1) 留学生宿舎の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営(進学希望者向けの日本語を中心とする教育)
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(社)日・タイ経済協力協会、ABK留学生友の会との連携・協力

◆会費(年額)◆

正会員 1口 1万円
賛助会員 1口 5万円
特別会員 1口 10万円

会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円(十税)でお送りいたします。

当財団に対する寄附金は、所得税、一部自治体の個人住民税、相続税、及び法人税の税制上の優遇措置があります。

2015年度より購読料に別途消費税をご負担いただくことになりました。何卒ご了承下さい。

おかげさまで、当財団は2014年4月1日に公益財団法人に移行しました。これまでご支援いただきました皆様には大変ご迷惑をおかけしておりましたが、これにより会費並びに寄附金は税制上の優遇措置の対象となります。今後とも、皆様のご支援の下、これまでと同様留学生宿舎の運営、留学生への情報提供、同窓会活動等の活動を通じ、アジアの青年の育成と友好親善のために微力を尽くす所存です。引き続き皆様のご支援を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

後記

ABKの竣工は1960年ですが、最近では1970年代、1980年代にABKに滞在していた研修生が、退職後奥様を案内して、突然ABKに顔を見ることがあります。また、最近はお孫さんまで日本に留学する時代になりました。そんな、アジア学生文化協会は来年60年を迎えます。(F)

今年、当財団小木曾理事長宛、ペルーのKenshu Kyokay Del Peru-AOTS PERUの会長Ernesto Furukawa氏より11月7日にペルー同窓会が今年50周年を迎え祝賀会を開催するとのことで、招待状が届いた。今年の2月にはタイのABK-AOTS同窓会がバンコクで50周年の式典を開催した。それぞれの半世紀にも亘る自主活動に敬意を表したい。これら同窓会の始まりは、1964年11月7日、アジア文化会館にて行われたアジア文化会館同窓会の発会式に遡る。(F)

タイのプミポン国王が10月13日に88歳で亡くなられた。国王として70年間の在位期間は世界1位とのこと。国連でもプミポン国王に敬意を表し、黙とうが行われた。国王がいかにタイ国民に慕われていたかは、国王の冥福を祈るため日々王宮前広場を埋め尽くした人の群れを見てもよく分かる。ABKでは、秋祭りにタイの6人のABKカレッジ日本語学校生が、プミポン国王に捧げる踊りを踊り、国王の話さを参加者の感動を誘った。(F)

(お詫びと訂正)

本誌前号(522号)に次の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
P24 左下写真説明(誤) 曹夫妻(右お二人)と → (正) 曹夫妻(左お二人)と
P4-16 左柱(誤) Prof.KAUO KURODA → (正) Prof.KAZUO KURODA

アジアの友 2016年10-11月号

2016年11月20日発行(通刊第523号)

年間購読(送料共)3,000円+税 1部 500円+税

発行人 小木曾 友
編集 アジアの友編集部
発行所 公益財団法人 アジア学生文化協会
東京都文京区本駒込2-12-13 (☎113-8642)
電話番号：03-3946-4121 ファクシミリ：03-3946-7599
振替口座：00150-0-56754 E-mail: tomo@abk.or.jp
ホームページ：(http://www.abk.or.jp/)

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)

2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN

☎+81-3-3946-4121 ☎+81-3-3946-7599

Email: tomo@abk.or.jp

Home Page: http://www.abk.or.jp/

会員並びにご購読のお申込みはメール・電話または巻末の振替用紙にてお願いいたします。

